

# 夕刊 磐城時報

昭和十三年一月二四日

## 支那軍捕虜の中に

### 意外！婦人あり

南京にて

木村守江

(其の三)

先日は何處まで書いたかはつきりせぬが捕虜二萬余の仕末に困ったことを書いたと思ふ、この捕虜の中に女が居たことは書くことを忘れたかも知れない、日本人の想像出来ない軍隊の中に女が居る何をやっていたものかご想像にまかせるが今度の支那兵が相當

強くて日本軍に可成多くの死傷者を出さしめたのもこの女軍があるからだなどと言ふ人もある、然しこれを全部本當にすることはどうかと思ふが然し女迄も出征しているのだから如何に挙国一致蒋介石の所謂救国の非常時に当たったかがうかがはれる、  
而もこの女一七歳より二十二

歳位迄のものであるが堂々正規兵の服装をしていて、一見男女の区別が日本兵にはつきりさせぬ、仲には裸にせねば分からぬのがあつたかと言つて笑っているものがあつた、全部断髪で仲々の美人も居た、捕虜をどうしたかと言つたことは軍司令官の令に由つた丈で此処には書くことが出来ぬから御想像にまかせることにする、  
次に十二月二十日は愈々揚子江を渡ることになった午前六時南京時間の午前五時でまだ真暗い中を南京城外を出発中島埠頭に行軍一里半不当には

日本軍艦二隻お捕獲した汽船が数隻我軍の渡河を待っていた、午前九時頃より乗船五隻の大型船と駄馬を乗せた数隻の発動機船で揚子江を渡つた、一同乗船凱旋を想像して言ふに言はれぬ感を起した、然し三十分も過ぎたかと思ふ頃津浦鉄道の終点なる浦口に到着下船した、気持ちのせいか船に乗りて中支に來たと思ふと寒気が身にしみる、後方部隊の来る迄と思つて焚火をした、この炎が拡がって、見るみる中に火事となつた、

続く